

# 漢文『刎頸の交わり（廉頗と藺相如）』定期テスト対策問題 | 書き下し・現代語訳・句法の頻出設問と解答 解答・解説

---

## 問1

- (1) 読み=ただ／意味=「ただ～だけ」（限定）
- (2) （例）武力によらず、弁舌（言葉・外交のかけひき）によって立てた働き。
- (3) （訳例）藺相如はただ口先の働きだけで（大した功も立てていないのに）、地位は私の上にいる。
- (4) （例）自分は城を攻め野で戦う命がけの大功を立てたのに、相如は弁舌だけの働きで自分より上の位についた、という不満。

〔解説〕「徒」は限定の副詞「ただ～のみ」。「口舌」は、前編「完璧帰趙」などでの相如の外交弁舌を指す。武人の廉頗には、それが「口先だけ」と見えた。

## 問2

- (1) 我相如を見ば、必ず之を辱めん。
- (2) 藺相如。
- (3) （訳例）私は相如に会ったら、必ず奴に恥をかかせてやる。

〔解説〕「見ば」=未然形+「ば」で仮定条件（もし会ったならば）。文末の「ん（む）」は話し手の強い意志。

## 問3

イ

〔解説〕家来たちは相如の真意を知らず、「主君は廉頗を恐れて逃げ隠れしている。並の人間でさえ恥じることだ」と考えて、いとまを願い出た。

## 問4

- (1) ゆゑん（ゆえん）
- (2) 理由・わけ。
- (3) （訳例）私どもが親類のもとを離れてあなた様にお仕えしている理由は、ただあなた様の高い徳義をお慕いしているからです。

〔解説〕「所以」=「～する理由」を表す重要語。「徒だ～なり」の限定表現とあわせて、「高義を慕って仕えてきたのに（今のあなたは恥ずかしい）」という諫言の前置きになっている。

## 問5

- (1) 抑揚（の句法）
- (2) （訳例）そもそも平凡な人間でさえ、このようなこと（逃げ隠れ）を恥ずかしく思います。まして將軍や大臣の身であればなおさらです。
- (3) ごくふつうの人・凡人。

〔解説〕「Aすら尚ほ～、況んやBをや」は、程度の軽いAを引き合いに出して重いBを強調する**抑揚形**。「将相」は將軍と宰相（大臣）。

## 問6

- (1) 秦王。
- (2) (訳例) そもそもあの秦王の威勢をもってしても、この相如は彼を朝廷で叱りつけ、その家臣たちにも恥をかかせたのだ。
- (3) (例) 秦王が璧だけ受け取って城を渡そうとしなかったとき、相如が秦の朝廷で命がけで渡り合い、璧を無事に趙へ持ち帰らせた出来事。

〔解説〕「廷叱」＝朝廷で(人前で)叱りつけること。「あの秦王さえ恐れなかった自分が、廉頗を恐れるはずがない」という次の反語への布石。

## 問7

- (1) 比較・選択(比較形)
- (2) (訳例) あなたがたから見て、廉將軍と秦王とでは、どちらが(恐ろしい・すぐれた)相手だと思うか。
- (3) (廉將軍は)秦王には及ばない、という意味。

〔解説〕「孰与(いづれぞ)」は二つのものを比べて「どちらが〜か」と問う**比較選択**の句法。「不若(しかず)」＝「〜に及ばない」。秦王>廉頗を家来に認めさせたうえで、「その秦王さえ恐れなかった」と続ける論法。

## 問8

- (1) 相如驚なりと雖も、独り廉將軍を畏れんや。
- (2) 「(たとえ)〜であっても・〜ではあるが」という逆接(讓歩)を表す。
- (3) 反語。(訳例) この相如は愚か者ではあっても、どうして廉將軍を恐れたりしようか、いや、恐れはしない。
- (4) もとの意味＝足ののろい馬(馱馬)。ここでは「愚かな者」と自分をへりくだって言う謙遜の語。

〔解説〕「独〜哉」＝「ひとり〜んや」と読む**反語**の句法。文末「んや」が反語の目印。

## 問9

- (1) 進んで〜しようとはしない・思い切って〜しない。
- (2) 藺相如と廉頗。
- (3) (訳例) 強国の秦があえて趙に攻撃を仕掛けてこない理由は、ただ我ら二人がそろっているからなのだ。

〔解説〕「敢へて〜ず」は「(あえて)進んではしない」という否定表現。文(相如)と武(廉頗)の二本柱が秦への抑止力になっている、という大局の認識。ここでも「所以」(理由)が使われている。

## 問10

- (1) 今兩虎共に鬪はば、其の勢ひ俱には生きず。
- (2) 廉頗と藺相如(趙を支える二人の重臣)。
- (3) 部分否定。
- (4) (訳例) いま二頭の虎が争えば、その成り行きとして、両方ともに生き残ることはできない。

〔解説〕「不俱〜」は「俱には〜ず」と読み、「両方とも〜というわけにはいかない(少なくとも一方は倒れる)」の**部分否定**。否定語が「俱」の前に来る形。二人が争えば趙の柱が折れ、秦につけこまれる、という危機感を述べる。

## 問11

- (1) 吾の此を為す所以の者は、国家の急を先にして私讎を後にするを以てなり。
- (2) 廉頗との衝突を避けて、逃げ隠れするようにふるまってきたこと。
- (3) ここでの「先」「後」は名詞ではなく、「先にする（優先する）」「後にする（後回しにする）」という動詞の働きで使われている。
- (4) (訳例) 私がこのようにしている理由は、国家の危難を第一に考え、個人的な恨みを後回しにしているからだ。

〔解説〕本文の最重要文。「所以」＝理由。「先A後B」＝「Aを優先しBを後にする」。「私讎」は個人的なうらみ・あだ。設問4・9の「所以」とあわせて確認しておくこと。

## 問12

イ

〔解説〕私情・私怨を抑えて、国家（公）のことを第一にする態度なので「滅私奉公」。ア「私利私欲」は正反対、ウ「付和雷同」は主体性なく同調すること、エ「温故知新」は学問の姿勢で、いずれも不適。

## 問13

- (1) にくたんふけい
- (2) 上半身の衣を脱いで肌をあらわにすること（罰を受ける罪人の姿勢を示す）。
- (3) いばら（の杖・むち）を背負うこと。「この荊で私を打ってください」という、罰を受ける覚悟での心からの謝罪を伝える行動。

〔解説〕「肉袒負荊」はここから「心からわびること・全面降伏して謝ること」を表す故事成語になった。大將軍が自ら罪人の姿になった点に、謝罪の深さがあらわれている。

## 問14

（賓客の）仲立ち・手づるによって、の意味。

〔解説〕「因る」＝～を仲立ち（手がかり）とする。屋敷に出入りする食客のつてを頼って相如の門を訪れた、ということ。

## 問15

- (1) 鄙賤の人、將軍の寛なることの此に至るを知らざるなり。
- (2) 廉頗自身。自分を「いやしくつまらない人間」と呼ぶことで、深い反省とへりくだりの気持ちを表す効果がある。
- (3) 藺相如。
- (4) (訳例) 心のいやしいつまらない私は、將軍（あなた様）の寛大さがここまでは存じませんでした。

〔解説〕誇り高い武人の廉頗が、自分を「鄙賤の人」、相如を「將軍」と呼ぶ。呼び方の逆転に、心からの敬意と謝罪が読み取れる。

## 問16

- (1) 卒に相与に歓びて、刎頸の交はりを為す。
- (2) 読み＝つひに（ついに）／意味＝とうとう・最終的に。

(3) (訳例) とうとう二人は打ち解けて喜び合い、刎頸の交わりを結んだ。

〔解説〕「相与に」＝たがいに・いっしょに。なお出典の本文では「歃」を「驩」と書く本もある（読みは同じ「よろこぶ」）。

### 問17

(例) 「刎頸」は首をはねること。相手のためなら自分の首をはねられても後悔しないという、生死を共にするほどの固い友情・交わりをいう。

〔解説〕単なる仲良しではなく、「命を懸けてもよい」という極限の信頼関係を表すのがポイント。故事の由来（対立→和解）とセットで覚える。

### 問18

(1) (a) なり (b) なし (c) なす (d) なす

(2) (a)の「為」は「～になる（就任・変化）」の意味で、「趙の將と為り」＝趙の將軍になった、ということ。(b)の「為」は「する・おこなう」の意味で、「勞を為す」＝働きをする、ということ。

〔解説〕「為」は「なす（する）」「ナル（なる）」「たり（～である）」「ためニ」など、文脈で読み分ける多義の重要字。(d)「交はりを為す」は「(交わりを) 結ぶ」の意味合い。

### 問19

(例) 「管鮑の交わり」は、鮑叔が管仲の失敗や弱さを終始変わらず深く理解し続けた、相手への深い理解にもとづく終生の友情をいう。これに対し「刎頸の交わり」は、いったん激しく対立した二人が誤解を解いて和解し、互いのためなら首をはねられても悔いなしと結ばれた、生死を共にする命がけの友情をいう。

〔解説〕「理解の友情＝管鮑」「対立を越えた命がけの友情＝刎頸」と対比して覚える。どちらも『史記』に由来する友情の故事成語。

### 問20

(1) 史記 (2) 司馬遷 (3) 前漢 (4) 紀伝体

〔解説〕『史記』は前漢の司馬遷が著した歴史書。帝王の記録「本紀」と人物の伝記「列伝」などで構成される形式を紀伝体といい、年代順に記す「編年体」と区別する。本話は「廉頗藺相如列伝」にある。

### 問21

イ

〔解説〕アは「恐れていた」が誤り（国家のために避けていた）。ウは「許さず対立したまま」が誤り（自ら謝罪して和解）。エは「趙王が命令」が誤り（和解は廉頗の自発的な謝罪による）。

### 問22

(解答例) 大將軍の地位にありながら、過ちに気づくとすぐに罪人の姿で謝りに行った廉頗は潔いと思う。素直に非を認める態度こそが、命がけの友情の出発点になったのだと考える。(約80字)

〔解説〕「過ちを認めて行動で示した廉頗の潔さ」または「それを受け入れた相如の度量」に、本文の内容（肉袒負荊・刎頸の交わり）をからめて書けていればよい。賛否・視点は自由。